

## 2024 CoSTEP 講義一覧

開講 特別講演		5/11	安彦良和、歴史マンガを語る。	安彦良和 漫画家/アニメーター/監督	「歴史の中には、現代へのヒントとなるものがあります」 漫画家そしてアニメーターである安彦良和さんは歴史マンガの意義をこのように語ります。 科学では、資料を通して事実というものを追求していきますが、歴史マンガでは歴史資料の客観性の上に作家の想像力を重ねて、新しい歴史観を作っていきます。 歴史マンガは、手塚治虫さんや少女漫画家らによって、「歴史」を語る新たな手法として生み出されてきました。組織で作品を制作するアニメーターを経て、より個人の裁量で創作できるマンガという媒体に惹かれた安彦さんは、創作のテーマに「歴史」を選びました。 「歴史には、場所があり、人がいて、その人がどんなことをしたのかがわかります。そして、当時の人たちが見たであろう線稿は変わっていません」 安彦さんは、日本の古代史の取材のため、奈良県や鳥取県などを旅しています。社会の状況、建物の様子は変わりますが、漫画家の目に映る線稿は変わることなく、そこから想像力をふくらませストーリーを作り上げていくそうです。客観的な資料を読み込むだけでなく、その時代の人たちはどんな景色を見ていたのか、どのように歩いたのかを肌で感じる事が、創作のヒントとなると安彦さんは語ります。 本講演では、これまで多くの作品を生み出されてきた安彦さんに、歴史マンガの創作に至った経緯や、その創作活動に対する想いを伺います。 歴史マンガという創造的な表現方法を知ることで、これからの科学技術コミュニケーションの可能性を広げることになるでしょう。	
	モジュール1	1-1	5/12	科学技術コミュニケーションの入り口	奥本素子 北海道大学 CoSTEP 部門長 /大学院教育推進機構 准教授	科学技術コミュニケーションの世界へようこそ。科学技術コミュニケーションは、科学をわかりやすく面白く伝えるだけでなく、科学技術の課題を語り合う場を設けたり、科学技術の未来について創造したりと、その活動は幅広く、また単発的な活動から長期的な関係性作りまでその密度も多様です。本講義では、科学技術コミュニケーションの水平的な広がり様々な深度について理論と実践の面から紹介していきます。
		1-2	5/18	コミュニケーションを改めて考え直す	種村剛 北海道大学 大学院教育推進機構 リカレント教育推進部 特任教授 /CoSTEPフェロー	私たちはCoSTEPで「科学技術コミュニケーション」を学ぼうとしています。それではそもそも「コミュニケーション」とは何でしょうか。あるいは、なぜ「対話」が大事なのでしょう。この講義では、コミュニケーションおよびその近接概念について説明できるようになることを達成目標とします。加えて、大学で「科学技術コミュニケーション」を「学び直す」ことの意義について確認します。
		1-3	6/1	博物館・科学館において最先端の科学技術と社会受容をいかに展示するか	塩瀬隆之 京都大学総合博物館 准教授	自然史の動物標本や文化史の考古遺物など、博物館や科学館の来館者にとって連想しやすいあるいは馴染みのある展示資料が多い。これに比して特に最先端の科学技術を紹介しようとすると、科学技術の進展に伴って、極小世界や人間の目で不可視などそもそも把握困難である。本講義では、ノーベル賞級の研究や社会実装以前の科学技術をどのように展示するかその模索を通して科学技術コミュニケーションのあり様を考察する。
1-4		6/8	社会の中での科学技術コミュニケーションの役割：科学ジャーナリストを例に	隈本邦彦 江戸川大学メディア コミュニケーション学部 教授	科学ジャーナリストは科学技術コミュニケーションの職業の典型です。科学や医学に関する情報が複雑化・高度化する中で、その役割の重要性は増しているはずですが、現状では残念ながら十分な役割を果たしているとは言えない部分もあります。NHKの医療・災害担当記者としての経験をもとに、科学技術コミュニケーションが社会の中でどのような役割を求められているか、科学ジャーナリズムをめぐるいくつかの具体例を通して考えます。	
モジュール2	2-1	6/22	実践入門	朴炫貞 北海道大学 CoSTEP 特任講師	今までCoSTEPの中で行ってきた実践や、北大をフィールドにして進めてきているアートプロジェクトを中心に、科学技術コミュニケーションの実践例を具体的に紹介します。その企画意図や開催後の分析を探ることで、科学技術コミュニケーション実践の現状を理解し、今後の活動にヒントになることを目指します。	
	2-2	6/29	映像メディアによる科学技術コミュニケーション	早岡英介 北海道大学 CoSTEP 客員教授/ 羽衣国際大学教授	大学や研究機関広報、学校教育といった科学技術コミュニケーションの現場で、映像メディアの活用が始まっています。ライティングに比べると、映像制作は特有の文法や技術的なハードルがあるため、敷居が高いと感じる人も多いでしょう。もちろん撮影、編集、デザイン、台本制作まで全て一人でこなすには、相当な経験が必要です。しかしチームワークの中で、企画やディレクション、撮影、ナレーションといった制作プロセスの一部を担うことは可能です。機材や編集ソフトの進化で、何でも1人でもこなせる時代にはなりましたが、プロセスを分解してみると様々な表現スタイルの組み合わせで映像は成り立っています。本講義では、近年の制作現場で得られた最新の知見をお伝えします。	
	2-3	7/20	伝えるプレゼンテーション	古澤正三、池田貴子 北海道大学 CoSTEP 特任講師	学生生活やビジネス活動、科学技術コミュニケーションなど、さまざまな場面で多様なバックグラウンドを持った人々に接し、説明や報告をする機会が増えています。それに伴い、効果的に自分の考えを伝えるプレゼンテーションのスキルの重要性も高まっています。この講義では、プレゼンテーションの基本的な考え方、技術、スライドのデザインを学び、限られた時間で伝えたいことを伝えたい相手に最適な手段を用いて伝えることができるようになることを目指します。	
	2-4	7/27	サイエンスイラストレーションで伝える科学	大内田美沙紀 北海道大学 CoSTEP 特任助教	科学専門の「サイエンスイラストレーター」と名乗るようになって約10年。これまで大学や研究所、博物館などで鳥類学、昆虫学、魚類学、古生物学、そして生命科学に跨る分野のイラストを描く機会に恵まれてきた。サイエンスイラストレーションはただ見たままをそのまま描けば良いというものではない。伝えたい科学的本質によって、強調して描く部分と、あえて簡略化して良い部分がある。また、誰を対象とするか、何を伝えるかによって、うまくスタイルを調整する必要がある。これまでの経験を振り返りながらイラストの「伝える力」について改めて考え、活用法について紹介していきたい。	
	2-5	8/3	空想科学コミュニケーションで古びた未来を破壊せよ	宮本道人 北海道大学 CoSTEP 特任助教	未来を描くサイエンスライティングは、イベント・プレゼン・展示など様々な場面で必要になることもありますが、しかし「未来を想像して」と言われると、むかしの誰かが考えた未来像に引っ張られて思考してしまいがちです。科学コミュニケーション全般でこのような問題はよく生じますが、これはどう打破できるのでしょうか。本講義では、フィクションと科学技術を組み合わせることでイノベーションを生む思考法を紹介します。また、自分なりの科学コミュニケーションの枠組みを構築し、ムーブメントを起こし、社会を変えていく方法論を提示します。空想を現実につなぐ簡単な共創ワークも実施しますので、「空想科学コミュニケーション」スキルを身につける一助にして頂ければ幸いです。	
モジュール3	3-1	9/7	ミニ・パブリックスと参加・熟議のデザイン	三上直之 名古屋大学大学院 環境学研究所 教授	重要な公共的課題についての意思決定に、幅広い市民が参加して議論するための仕組みとして、無作為選出などにより社会の縮図となる一般の人びとを集めて話し合う「ミニ・パブリックス」という方法があります。その代表的な手法であるコンセンサス会議や市民陪審、討論型世論調査などは、科学技術への市民参加にも国内外で長く用いられてきました。近年では、気候変動対策にこの方法を応用した「気候市民会議」が、欧州を始めとして、日本を含む世界各地で行われるようになってきました。この講義では、ミニ・パブリックスの概要と応用例を学ぶことを通じて、科学技術に関する社会的な問題の解決に向けて人びとが共に考え協働するための参加と熟議のデザインについて考えます。	
	3-2	9/14	コミュニケーションの要素について	森岡晋行 株式会社森岡書店代表/文筆家	約10年にわたり、「一冊の本を売る書店」を運営するなかで、多くの作家や編集者、お客様とコミュニケーションを交わしてきました。また、昨年には、「ソウル・ライター日本関係蔵書展」のキュレーションを担当しました。この講義では、その経験をもとに、各々が活動を実施する際に必要とされる、コミュニケーションの要素について述べます。	
	3-3	10/5	日本でメディカル・サイエンスイラストレーターを職業として成り立たせるために	永田徳子tokco 株式会社レマン代表取締役/獣医師	私はメディカル・サイエンスイラストレーターという職業が海外で存在することを幼少期から知っており、憧れていた。獣医学を卒業し2008年まで医療機器開発センター内の豚のウェットラボにて獣医師として勤務している間にも専門的な絵を描いていた。「難しいことを伝える」「立場の違う人に専門的な内容を伝える」といった中で、イラストレーションの威力は絶大であった。ところがこの業界に飛び込んでみたら、あまりにも整備されていない、歓迎であった。ビジネスとして成立させる、という規模は人それぞれではあるが、健全な市場を作り、メディカル・サイエンスの発展を陰で支える専門クリエイター達がモチベーションを保ち、制作環境を整えることが社会課題であると考え、17年に及び啓蒙活動を行ってきた。その経緯と現状についてお話ししたい。	
3-4e	10/16	哲学思考の方法及びその伝え方～哲学カフェやメディアでの実践から～	小川仁志 山口大学 国際総合科学部 教授	今、哲学思考は様々な場面で実践されています。広義には哲学プラクティスと呼ばれますが、具体的には哲学カフェなどの対話、哲学カウンセリング、あるいは社会課題の解決への哲学の応用といった内容が含まれます。私自身は、これらに加え、テレビを始めとした各種メディアにおいて哲学思考を実践し、それをいかに伝えるかということを探求してきました。科学技術の分野においても有用なスキルだと思われるので、ぜひ参考にしていただきたいと思います。		
モジュール4	4-1	10/19	社会問題/社会関係資本を生み出すSNS	前田至剛 追手門学院大学 社会学部 准教授	現代はインターネット、とりわけSNSによるコミュニケーションが理め込まれた社会となっている。SNSはフェイク、炎上、分断を煽る情報の流れを生み出す一方、流動化・個人化した社会で求められる他者との接続を維持・管理するためのツールとなり、社会関係資本の蓄積にも貢献している。このSNSの両義性を左右する要素や条件について調査データにもとづき考えます。	
	4-2	10/26	感情的理解のためのアプローチ	池田貴子 北海道大学 CoSTEP 特任講師	社会で起きている問題に関わるステークホルダーは常に多様です。そして、そのステークホルダーの数だけ「言い分」や「当たり前」があります。対立する他人同士が理解しあうのはとても難しいことです。相手の立場や考えについて、理由や理屈ではなく「腑に落ちる」たり納得することができれば、少しは互いの距離が縮まるかもしれません。本講義では、札幌市民を悩ませる「都市ギョネ」にまつわる問題について、各ステークホルダー（地域住民、都市公園管理者、行政、野生動物研究者、コミュニケーターなど）が、どのように歩み寄ろうとしているのか、CoSTEPでの実習活動も絡めた現在進行形の取り組みをご紹介します。	
	4-3	11/9	感染症危機管理とコミュニケーション	齋藤智也 国立感染症研究所 感染症危機管理 研究センター センター長	2019年末に突如発生が報告された新型コロナウイルスは、瞬く間に世界中に拡がり、汎世界的流行（パンデミック）を起こすに至りました。ウイルスやそれが引き起こす疾病の性質がよくわからない中、日本では初期の調査からこの感染症が拡がりやすいリスク環境を明らかにし、「3密（海外では3Cs）」という言葉で示し、早期に市民に対策を分かりやすく伝えることに成功しました。今回のパンデミックを一つの事例に、未知の感染症の健康危機に対するコミュニケーションの課題を議論したいと思います。	
	4-4	11/16	SOGIESCの世界	瀬名波栄潤 北海道大学 文学研究院 教授	「性」は非常に複雑で流動的です。これまでは、「セックス・ジェンダー・セクシュアリティ」を使って人の性を説明してきたのですが十分ではありませんでした。そこで誕生したのがSOGIESCです。SOGIESCは性を総合的に表現する語で、身体性 (Sexual Characteristics)、性自認 (Gender Identity)、性表現 (Gender Expression)、性的指向 (Sexual Characteristics) それぞれの頭文字を並べたものです。2017年7月にILGA (国際レズビアン・ゲイ協会) が初めて使用し、日本では2020年11月に日本学術会議が「提言：性的マイノリティの権利保証をめざして (II)」で使用したことで国内でも注目されるようになりました。さて、SOGIESCは性的世界を取りこぼさなく説明できるのでしょうか。	
	4-5e	11/20	身体や心に介入する技術に対する倫理	佐藤岳詩 専修大学 文学部哲学科 准教授	現代社会では、ドーピングやサイボーグ化、スマートドラッグやモラルエンハンスメント、受精卵へのゲノム編集など、人の脳や心、身体に直接影響を与える科学技術の開発や利用が進んでいます。私たちは、これらの科学技術の利用の是非を、どのような理由から判断するのでしょうか。この講義では、科学技術の社会実装に伴う、法的・倫理的・社会的課題 (ELSI) について考えるために、特に倫理学の観点から判断の基準となる視点を提示します。	
モジュール5	5-1	11/30	自動化社会における障害者の体	キム・ウォニョン 作家	都市インフラの改善、市民権運動などの結果、韓国と日本の障害者たちは過去に比べて公共スペースに出かけられる機会が増えました。しかし、ただ物理的な空間に出かけることを超えて、人間と人間の出会い相互作用の機会も増えたと言えるのでしょうか。人口減少と急激な自動化過程を経て再構成される公共スペースは、障害を持つ人々にどのようにアクセシビリティを拡大し、または排除していると思いますか。本講義では、障害と技術、芸術をめぐる話をつなげ、これらの問いに答えていきます。	
	5-2	12/7	ファクトに基づく調査報道の限界と可能性、ジャーナリズムの本質とは	鈴木エイト ジャーナリスト/作家	「カルトと政界」「2世問題」「ワクチン騒動」「ニセ科学」大手メディアが報じないトピックを継続取材してきました。独りよがりにならないために重要なのは「ファクトに基づくデータの蓄積」です。独自の調査報道の実例を示し「報道における公平性、両論併記の是非」「被害者を前面に立てる報道姿勢について」「ナラティブベースの報道による弊害の事例」「ドキュメンタリーにおけるコンテンツ消費」「ニセ科学者と思考停止」「報道と科学的正しさ」といった論点・視点から「ジャーナリズムの本質」について話します。疑念をスルーせず問題意識を継続しモチベーションを保つ乗組。身の危険やリーガル・スレッド (法的威嚇) への対策も。	
	5-3	12/14	科学技術にまつわる不安との付き合い方	大浦宏照 NPO法人 市民と科学技術の仲介者たち 代表理事	飛行機に乗ると、墜落が心配になる方いますよね。医師から薬をもらったり、副作用が気になります。科学技術には、不安がつきものです。航空機事故や副作用の統計的データを並べれば、不安は払しょくできるのでしょうか？ ちょっと待って。不安を感じるの、いけないことですか？ 私は、防災教育や、「核のゴミ」に関する対話の場の運営などを行っています。迷いながら、科学技術にまつわる不安との付き合い方について、90分一緒に考えてくださいませんか。	
	5-4e	12/18	医療現場が直面するコミュニケーションの課題について考える	加部一彦 埼玉医大総合医療センター 新生児科 教授	人とひととが交わる場所にコミュニケーションが生まれ、コミュニケーションを通じて私たちはお互いを理解する事ができる…はず。いや、少なくとも、私たちはその様に考えているからこそ、様々な手段で他者を理解しようと意識的、無意識的に生きています。しかし、本当に自分でない「他者」を理解することはできているのでしょうか？ それは可能なのでしょうか？ 講義では周産期・新生児医療の現場で医療専門家と患者・家族との間に「相互理解」を巡ってどの様な葛藤があるのか、また、それをどのように克服しようと模索しているのかを紹介し、「人とひととのコミュニケーション」について皆さんと改めて考えてみたいと思います。	
	6-1	12/21	生物多様性異変と迫り来る危機	五箇公一 国立環境研究所 生態リスク評価・対策研究室長	新型コロナウイルスの流行によって、世界的な社会混乱がもたらされ、国際経済は大きなダメージを負った。加えてウクライナ紛争に始まるナショナリズムと国際軋軋の深刻化が、食糧およびエネルギーの国際需給に大きな変化をもたらし、資源大国の我が国は、特に逼迫した状況に立たされている。明らかにいきすぎたグローバル経済への依存が、経済および社会の持続性を劣化させていることがこの数年間の国際情勢により露呈した。 さらに地震や津波といった巨大自然災害が絶えないこの国土においては、どのエリアにおいても社会インフラ崩壊と人命の危機というリスクが我々の身近に常在している。これらの危機に対して我々がとるべき道は、安心・安全で持続的な社会及び国家の構築であり、そのためには、まず自然環境と私たち人間社会の向き合い方から考えなくてはならない。本講演では自然環境の生物学的根幹である生物多様性およびその保全というテーマを通して、これからの自然共生社会のあり方と、日本の未来について考察する。	
モジュール6	6-2	1/11	逆になんでうまくいったと思います？：みんなで作る「学問バー試論」	豆腐 (山口真幸) 学問バー-Kisi店長	2023年1月の開店以来、どうにか潰れることなくやってこられた学問バー-Kisi。「商売として成り立つと思えない」「3ヶ月でポシャる」等々、当初なかなかの言われようだった店がどうにか続いてきたのはなぜなのか？ 当店で起こってきたこと・起こっていることは要するに何なのか？ 店長である私の中にも明確な答えのないいくつかの問いについて、種々のデータを参照しつつ皆さんと一緒に考えていければ幸いです。	
	6-3	1/25	サイエンスを届けるメディアとしてのインフルエンサーモデル	須貝駿貴 QuizKnock /国立科学博物館認定 サイエンスコミュニケーター /博士 (学術)	サイエンスの世界ではそれぞれの分野で日進月歩の業績が上がっている。また、その業績を正確かつ重要性を落とさず伝える「サイエンスライティング」の技術も日々向上している。一方で、多くの市民に届いているかという点で悩みを抱える機関や個人は多い。 本講では、市民へのリーチ数、すなわち、視聴数をもっとも直接的に売上となるYouTuberという立場から、サイエンス分野のアウトリーチにおいても「愛着」や「推し」という観点が有効であることを説明する。 加えて、「企業案件」によって多くのステークホルダーに利することで資金を獲得し、長期に活動を継続するとともに、さらに大きな層へとリーチすることを目指した事例を紹介する。	
	6-4	2/1	すでにはじまっている未来と日本の今	若宮正子 一般社団法人メロウ倶楽部 理事 /熱中小学校教諭 /公益社団法人 NEXT VISION 理事 /内閣府・高齢社会対策大綱策定のための検討会構成員/岸田首相主催・デジタル田園都市国家構想実現会議構成員/デジタル庁デジタル社会構想会議構成員/総務省デジタル活用支援アドバイザー/ボード構成員 /ITエバンジェリスト	電子政府化、電子社会化という点で日本は他国に比して非常に遅れている。これは経済ばかりでなく、行政、国民生活などあらゆる面での非効率化の原因となっている。この原因の第一が国民の、中でも高齢者のITリテラシーの低さにある。については早急に思い切ったIT推進策を実行に移すことが喫緊の課題と思われる。また教育内容が「操作手順」等に偏ることなく「デジタル化」の原点からの教育であることを求めていきたい。	
	6-5	2/8	CoSTEPの講義を振り返って	CoSTEP教員	CoSTEPで開講された講義を振り返り、「科学技術コミュニケーションの思考」、「情報の分析と行動のための計画手法」、「科学技術コミュニケーション実践」に関わる知識や技能、そして実践事例のポイントをCoSTEP教員が解説していきます。本講義を通して、講義内容の理解を深め、一年間の学びの省察をし、今後の実践活動に関連付けていくことを目指します。	